

北朝鮮後継体制構築過程分析の一視角

筑波大学大学院人文社会科学研究科教授 古田博司

まえがき

本稿は金正恩への後継体制の様態を題材として 2010 年の北朝鮮内政の分析を試みるものであり、そこには、後継体制構築という目的意識が現下の北朝鮮政治を動かす主要なファクターとなっているとの認識が通底している。ただし、予め筆者の基本的な立場を示しておくならば、筆者は北朝鮮政権内部の後継体制をめぐる角逐や主要アクターの動向、人事の変動から金正恩の後継者としての地位の「安定度」「現住所」をリアルタイムに把握せんとする手法には自ずから限界があり、一外部観察者にとっては、後にその内実が（ある程度）明らかになった際にそれと比較・対照し、検証をより充実させるための手がかり—つまり一つの^{よすが}縁—を形作っておくことが、現時点では有用と考えている。筆者の個人的経験に照らしても、金正日が後継者としての地歩を築いていた 1970 年代当時、その動静は外部にはほとんど伝わらず、憶測のみが先行して分析が行われる状態がかなりの長期にわたり継続していた。今日においては「常識」として語られる金正日の後継過程は、実際には北朝鮮当局がそれを語るようになった 1980 年代後半以降にはじめて明らかになったのであり、1970 年代当時に公的文献上で盛んに用いられていたターム「党中央」についても、それが金正日を指称する符牒であったことが自明のものとなったのは、金正日が公式に表舞台に登場した 1980 年以降のことであったと記憶している。そして、逆に 1970 年代当時において金正日すなわち「党中央」がいかなる行動をとり、それを当時の宣伝媒体がいかに伝えたのかをまとめる作業、またそれを後に「公表」された情報と照合することで、その実態を検証するといった大作業は、ごく限られた範囲で行われるにとどまり、今日に至っているのである。金正日の後継体制構築過程を一つの「基準」として金正恩のそれを分析しようとする際に問題となるのはまさにこの点であろう。むろん当時と現在では情報量・通信媒体の多様性の面で格段の差があり、さらには北朝鮮内部からの情報流出の程度も当時とは比較にならない点は留意する必要がある。ただ、ともすればセンセーショナルな内容に傾きがちな報道と予測、内部情報を用いての現状分析を補完・相対化する意味でも、「公的文献を用いつつ現時点で知りうることを確認しておく作業は、地味ながらも必須のステップであり、そこに一定の意義を認めることが可能と考えられる。以下においては、このような問題意識に依拠しつつ考察を進めていきたい。言説上に浮かんだ金正恩の動向、そして今後の動向を考える上でポイントとなるであろう事項の整理が、その

主な内容となる。

1. 金正恩の動静と関連言説の現状

金正恩が朝鮮労働党機関紙『労働新聞』上に初めて登場したのは2010年9月28日付「朝鮮人民軍最高司令官命令第0051号」においてのことであり、そこでの朝鮮人民軍大将の軍事称号授与を皮切りに、金正恩は党中央委員会委員・党中央軍事委員会副委員長に相次いで選出されるとともに、矢継ぎ早にその公開活動を展開していくこととなった。最終的には2010年に同紙が報じた金正恩の活動は35回に及んだが、それらが約3ヶ月の間に行われていることを考慮すれば、そこには相当な性急さが看取されよう。それらの行動を一覧表にまとめるならば、以下のごときものとなる。

<付表1> 金正恩動静（2010年）¹

※『労働新聞』2010年分より、金正恩の存在が明示されたものを抽出した。

※なお、名前が紹介された報道においては、金正恩にはすべて「朝鮮労働党中央軍事委員会副委員長」の肩書きが付されている。また、報道上に登場した金正恩の行動は、すべて金正日に同行する形で行われている。

- ・「朝鮮人民軍最高司令官命令第0051号 朝鮮人民軍指揮成員たちの軍事称号を引き上げることについて」で大将に（9月28日付）
- ・党中央軍事委員会副委員長・党中央委員会委員に就任（9月29日付）
- ・金正日とともに朝鮮労働党の中央指導機関成員たち、党代表者会参加者たちと記念撮影（9月30日付）
- ・党創建65周年に際して行われた朝鮮人民軍第851軍部隊軍人たちの協同訓練を視察した金正日に同行（10月6日付）
- ・党創建65周年に際して行われた銀河水「10月音楽会」を金正日とともに観覧（10月7日付）
- ・新たに建設された国立演劇劇場を視察し、新居入りした芸術人たちの家庭を訪問した金正日に同行（10月9日付、写真中にもみ登場）
- ・朝鮮労働党創建65周年慶祝中央報告大会に金正日とともに参席（10月10日付）
- ・朝鮮労働党創建65周年慶祝大集団体操と芸術公演「アリラン」を金正日とともに観覧（10月10日付）
- ・錦繡山記念宮殿を訪ねて金日成に敬意を表する金正日に同行（10月10日付）
- ・朝鮮労働党創建65周年慶祝閱兵式に参席した金正日に同行（10月11日付）

- ・朝鮮労働党創建 65 周年大慶祝夜会「繁栄せよ労働党時代」に金正日とともに参席（10 月 11 日付）
- ※訪朝した中国共産党代表団の持参した記念品に「金正銀」の表記（10 月 12 日付）
- ・朝鮮労働党創建 65 周年慶祝閱兵式に参加した指揮成員たちと会い、記念撮影する金正日に同行（10 月 13 日付）
- ・中国人民志願軍の朝鮮戦線参戦 60 周年記念群集大会に金正日とともに参席（10 月 26 日付）
- ・中華人民共和国高位級軍事代表団をはじめとする中国の各代表団に接見する金正日に同行（10 月 26 日付）
- ・朝鮮人民軍第 10215 軍部隊指揮部を視察する金正日に同行（10 月 26 日付）
- ・党中央委員会秘書と党中央軍事委員会成員たちを引率して檜倉郡にある中国人民志願軍烈士廟に花環を進呈する金正日に同行（10 月 27 日付）
- ・党中央委員会秘書と党中央軍事委員会成員たちを引率して檜倉郡にある前中国人民志願軍司令部を訪問する金正日に同行（10 月 27 日付）
- ・金正日とともに銀河水「10 月音楽会」最終公演を観覧（11 月 2 日付）
- ・熙川発電所建設場を現地指導した金正日に同行（11 月 4 日付）
- ・金正日とともに「故趙明禄同志の棺」を訪ねて哀悼の意を表す（11 月 9 日付）
- ・呉仲洽 7 連隊称号を授与された朝鮮人民軍第 3875 軍部隊を視察する金正日に同行（11 月 13 日付）
- ・朝鮮人民内務軍熱誠者大会の参加者たちに面会した金正日に同行（11 月 21 日付）
- ・龍湖鴨工場を現地指導した金正日に同行（11 月 23 日付）
- ・龍淵海岸養魚事業所と龍井養魚場を現地指導した金正日に同行（11 月 23 日付）
- ・龍城食料工場に新たに建設された醤油職場を現地指導した金正日に同行（11 月 24 日付）
- ・金日成総合大学平壤医学大学を現地指導した金正日に同行（11 月 24 日付）
- ・大安親善ガラス工場に新たに建設された強質ガラス職場と江西薬水加工工場を現地指導した金正日に同行（11 月 25 日付）
- ・平壤市の軽工業工場と新たに建設された普通江百貨店を現地指導した金正日に同行（12 月 11 日付、写真中にのみ登場）
- ・拡張された平壤小麦粉加工工場と船興食料工場、香満楼大衆食堂を現地指導した金正日に同行（12 月 12 日付）
- ・朝鮮人民軍第 34 次軍務者芸術祝典で当選した中隊軍人たちの公演を金正日とともに観覧（12 月 13 日付）

- ・朝鮮人民軍第 2670 軍部隊を視察した金正日に同行（12 月 17 日付）
- ・熙川蓮河機械総合工場を現地指導した金正日に同行（12 月 22 日付）
- ・熙川青年電機連合企業所と熙川発電所建設場を現地指導した金正日に同行（12 月 23 日付）
- ・朝鮮労働党中央委員会・中央軍事委員会と朝鮮民主主義人民共和国国防委員会で催した慶祝宴会に金正日とともに参加（12 月 25 日付）
- ・功勳国家合唱団の「12 月慶祝音楽会」を金正日とともに観覧（12 月 26 日付）

一方、かくのごとき「活発」な対外活動、特に金正日への随行を通じた隠然たる影響力の誇示とは対照的に、一般の言説における金正恩の取り上げられ方はきわめて限定的・間接的なものにとどまっており、抽象的な用語を通じた暗示がなされるに過ぎない。金正恩は自身を讃頌したとされる歌謡『歩み（パルコルム）』を連想させる語句の恣意的な多用と暗喩によってその存在が示唆されるのみであり、斯様な傾向は金正恩が表舞台に登場し、盛んに公開活動を行うようになって以降も変化しなかったのである。

「最先端征服者という言葉は科学者たちにのみ向けられたものではない。わが祖国を主体の CNC 強国へと転変させていかれる敬愛する將軍さまを追って全国のすべての科学研究基地、全国のすべての工場・企業所と協同農場、革命のすべての哨所が一つの歩みに合わせて進まねばならない」²（下線筆者。以下同）

「崇高な愛国愛民の熱情で心を燃え上がらせ、沸き立つ大高潮激戦場へと超強度の強行軍を限りなく続けられる敬愛する將軍さまの歩みに心臓の拍動を合わせ、さらなる高みへと駆け上がらんとする従業員らの熱意は天をも衝かんばかりであった。工事場には自力更生の山びこ、革新の山びこが高くこだました」³

「降仙の烽火につづき、衛星発射と地下核試験の大成功、今やさかえる我らが日々の時代語となった主体鉄とビナロン、我々式の CNC 化と我が肥料澆、そして龍城の先軍鋳物工場の完成と、第 2 の西海閘門のような大溪島干潟の大勝利…。日々、時々刻々近づく、豊に降り注ぐこれらの奇跡と変化は、円興の丸々としたリンゴのように良く熟れた果実、みごとな実り、爽快な実りだ。…試練の氷板を断ち割り、幸福の種を一つ一つ埋めてこられた父（金日成のことか：筆者註）の苦労、根（金正日のことか：筆者註）となられ幸福の実を穫り入れられた、その不滅の労苦がリンゴの香りよりも濃く、さらに暖かく円興の地をただよう。…我らの將軍さまは遠く険しい強行軍の路を歩まれつづけ、人民たちはリンゴの海、笑い声をぱっと花咲かせている、これこそ社会主義のこの土地が今日と後孫万代につたえる人民の幸福と、その偉大な根（金正恩を暗示か：筆者註）に対する胸暖まる絵巻物なのだ」⁴

このように、公的文献上にあらわれた金正恩の姿には明確な「二面性」—存在感の誇示と希薄な内実—が内在しており、このことから、特筆すべき実績がまだ備わらず、ゆえに金正日の権威を藉りつつ、ゼロからその構築を開始せざるを得ない状況が垣間見えよう。ただ、まさに斯様な状況であるがために、現今の北朝鮮が掲げる重点課題の「解決」が金正恩の業績と強く関連付けられながら図られていくであろうこと—一言説上においてその様な「語り」が試みられるであろうこと—は容易に推測され、また、『労働新聞』の記述傾向からは、金正恩が後継者としての地位を固めていく上で直面するであろう問題点の存在も看取される。それらの諸点を一つ一つ取り上げ、検討を加えることにより、北朝鮮が金正恩による後継過程の構築に際して直面している現状を「読み解」き、加えて今後を見通すための手がかりを列挙したい。

2. 課題としての経済—「実績」化の端緒？

まず、2010年の『労働新聞』の報道傾向から浮かび上がる顕著な傾向として挙げるべきは、体制の優位性と経済的パフォーマンスの関係をめぐって揺れ動く記述のスタンスであろう。具体的には、経済的ファクターと体制の優劣を区分する傾向、そして経済的成果によって体制の優位性を「立証」せんとする傾向がない交ぜとなって、一種の混乱した様相が紙面上に呈されていたのである。「金正日を戴く」というまさにその一点に体制の優位性の根源を求めた言説、そしてより物質的充足の側面を先立たせた言説は、その典型例といえる。

「自分は愛国という言葉をおっしやりつつ、愛国とは単純に自分が生まれ育った国、自民族に対する愛ではない、愛国という言葉の中には国の自主権と民族の尊厳を愛するという深奥な意味が込められているのだと語られたそのお言葉が、今日再びわれわれの胸を重く打っている。胸を埋めた地があり、仰ぎ見る空があるからといって、それは祖国といえるのか。わが軍隊と人民にとっての祖国とは、ほかでもなく、烈火のごとき愛を抱く偉大な人間、自主的尊厳と運命を守り輝かせてくださる絶世の愛国者、金正日將軍さまをいただいた誇り高きわれらの生であり、幸福である。なんと偉大な歴史がかのお方の（歩まれた：筆者註）月日の中を流れたことか。先軍の青い空へと祖国の尊厳と国力の象徴である人工地球衛星が駆け上がり、CNCの風が吹く最先端突破の時代、ピナロン三千里が繰り広げられる世にも稀なる時代に世界の真ん中で主体の祖国、先軍朝鮮の尊厳と威容を広くとどろかせる絶世の愛国者を仰ぎ見るほどに、千万倍の響きでもって胸を打つ熱き呼び声よ。偉大なるわが祖国！將軍さまをいただいたわが祖国は偉大なり。われわれの祖国は偉大なる金正日將軍さまなのである！」⁵

「今や、われわれが人民生活をめぐって国力を語るべきときとなった。食料品生産のCNC化・

無菌化が世界的にもっとも先進的な水準に達した龍城食料工場、超高温生産工程から生み出される甘美な牛乳製品をご覧になって満面の笑みをたたえられたわが將軍さまの心中を考えてもみよ。食料品を生産する工場の水準を龍城食料工場の水準に至らしめることについての敬愛する將軍さまのお考えを最高司令部の戦闘命令として受け止め、決死貫徹する道で人民生活向上の決定的突破口が開かれるようになった。わが人民が食べ、着て、暮らすあらゆるものを質と文化性において最高水準に到達させねばならない。これは敬愛する將軍さまが立ててくださった人民生活向上の基準である。CNCの風が吹いている平壤穀産工場の現実には、わが人民の食生活に繰り広げられるであろう文明の鐘の音を高く響かせてくれている。原料の投入から包装に至る最後の工程まで、製品に人の手が触れず衛生性が100%保障され、包装も見栄えのする食料品が人民の家々に届くその日は眼前に迫っている。大紅湍の吹雪の中、焼いたジャガイモで食事を済ませながら歩んでこられた峻厳なる行軍の途、幾多の戦争にも匹敵する激烈な反帝階級聖戦の道をかたくも堂々と突破してこられたわが將軍さまの行軍の途の前には、まさに人民生活という一つの目標と理想が光を放っていることを、われらは幾度胸に刻みつけることになるのだろうか。偉大な首領様が託していかれた祖国を衛星発射国、核保有国、主体鉄強国、CNC強国、ビナロン強国へと導いていかれるわが將軍さまの尽きせぬ思索の中には、人民に抱かせる文明への志向と決心が燃えさかっている」⁶

もとより、斯様な記述の背景には、最優先課題として「人民生活の向上」を掲げ、国産品（特に日用品などの消費財）の充実による民生の安定を喧伝しつつも、それを十全になしえない現状が存していた。この点に関しては、例えば、人民軍が運営に携わっていることで注目を集めたある商店の紹介記事が北朝鮮当局の問題意識をよく示しており、興味深い。

「この商店にはごてごてした他国の食料品はただの一つとしてない。しかし食料品の加工水準と包装水準を見れば、他国の食料品に手を伸ばしたくなる気持ちは消え失せる。100%自らの手で作った国内産商品であるが、需要は非常に高い。一つ一つがみな味のよい健康食料品である上、包装の水準が高いことは、見るだけでも気分がよい。トウモロコシ、ジャガイモ、豆で作った主食物と山菜で作った各種副食物をはじめ、伝統的な飲食物が多いところは見ているだけでも食欲が満たされるようであり、わが国にはないものはなく、食べるものが実に多いという考えが浮かぶ。平凡な女性たちもこの商店に入って商品を買っていき、他人のものに幻想を抱いていた人々がこの商店を見て回って正気に返ればいいと語っている。わが国にかくもよいものが多いのに、何ゆえしなびた他人の商品を高い値段で買って食さねばならぬのか、とロ々

に、清々した様で語っている。わが人民の手で直接作って売る本当の食料品であるゆえに良く、種類が多いのも良く、市場よりも価格が安くて良いという。高級食料品を思うまま買うことができる人民的な商店だと話す群衆の声は実に喜ばしく響く。われわれは自国の国営商店がよい。この商店に来てみると、食べる分野での輸入商品と市場個人商品に対する幻想と依存心を完全に払い落とされる。珍しい食料品がぎっしり詰まった商店に足を踏み入れると、信心と力が湧き、民族的自負心で膨れ上がる。強盛大国が実現したかのようだ、これが強盛大国でないなら何なのだ、という人民たちの喜びにあふれた声はいかに多くのことを考えさせることか。革命的大高潮の時期、人民が愛する奉仕基地が生まれたと語り、人民軍隊が人民たちのためにまたよいことをしたと、われらが將軍さまに感謝をささげたいと涙に濡れて語る声は切々としている」⁷

そして、かくのごとき姿が一種の理念型に過ぎないことは、ほかならぬ金正日が現地指導し、高く評価した百貨店に外国製の商品が並んでいる写真などからも明らかであった⁸。斯様な状態をもたらした経済政策のありようについては本報告書別稿に譲るが、このように、経済的成果一わけても体感的な生活水準に直結する民生部門における一を強調しつつも、実態としてのそれが言説上に展開される姿から乖離していることが、北朝鮮当局をして現状をプロパガンダによって包括的に整合させる上で困難を生ぜしめ、言説上の混乱を惹起しているとの状況が、『労働新聞』の報道傾向からは看取されるのである。ここに対外認識が介在する場合、経済的パフォーマンスにおける劣勢認識を体制そのものの優劣から分離させようとする傾向は一段と加速することとなる。

「渾然一体の悠々たる大河からこぼれた数滴の泡を見て愚かにも『診断』を下すあわれな者ども、GDP だの『ダウ指数』だの他には現実を評価するすべを持たぬ資本の奴隷どもはこの地に来て目の当たりにしない限り、死しても朝鮮の強大さの謎を解くことはできまい。(中略) 全社会にとどろくわが国の幸福の変事、繁栄の変事に目を奪われ、その意味も分からずに『急変事態』だのなんのと騒ぎ立てた輩どもは恥じるがよい。この愚か者たちは『改革』と『開放』を喚きたてるかわりに外国資本の奴隷、借金を負った身の上となった自らの不安な立場の心配をするがいい」⁹

そして、まさに斯様な状況から、金正恩の「実績」はこれらの点と関連するものとなるであろうことが強く示唆される。2011年以降、おそらく公的文献の記述においては「国産消費品の増産」

「国産品による外国製品の代替」が一つのトレンドを形成していくものと推測されるが、そこにおける金正恩の「貢献」がいかなるものとなる（される）か、後継体制の「定着度」を図る上でも注視していく必要があるだろう。

3. プロパガンダの「有効度」をめぐって

一方、上述の事例—日用品の国産化を強調する一方で、それに背馳するかのごとく外国製品の存在を「公表」するとの矛盾—からは、現今の北朝鮮が直面する問題点、すなわちイデオロギー政策の低調さと、その背景にあるプロパガンダの「有効度」の低下という構造が浮上する。公的文献上で外国製品の存在が公言される点は近年の顕著な特徴の一つであるが¹⁰、そこには、その存在を「公認」することで外国製品の導入と全般的な技術水準の向上を促すとのプラグマティックな政策的思考以上に、氾濫する外国製品の存在を隠蔽し続けることが、むしろプロパガンダの実効性に否定的な影響を及ぼすとの判断が介在していたものと推測される。もとより、プロパガンダが虚構の色彩を強く帯びることは周知の通りであるが、実際には虚構もまた完全に現実から自由ではありえず、現実が変化すれば、それに対応して虚構の内容も変容を遂げる点は注意すべきであろう。このことから、プロパガンダを「その虚構性」を理由に考察の埒外に置くのではなく、その内容変化の様相（いかに、どの程度変化したのか）に注目することによって、それを現実にかけている変化を推測するための「糸口」として逆用する手法が浮かび上がる。そして斯様な認識に立てば、近年の報道傾向の変化は—現実の変化がプロパガンダの変化を惹起したという点で—両者の「リンク」がなお機能していることを示すものであり、北朝鮮においてプロパガンダがいまだ有用性を完全に喪失していないことを暗示するものともあるいは捉えられようが¹¹、ともあれ、外国製品の存在を公言しなければならなくなったことから、プロパガンダ、さらにはイデオロギー政策を展開する上で北朝鮮当局が考慮しなければならない「現実との整合性」の要素がいつそう拡大したことが看取され、しばしば指摘される住民側のイデオロギーに対する「受容度」の低下（無関心）とともに、プロパガンダの影響力が著しく低下していることが、推測されるのである。『労働新聞』の言説がしばしば対外認識を伴い、しかもその「激烈さ」をさらに高潮させていることは、斯様な状況のいわば傍証と考えられよう。

「わが首領さまの体臭が熱くこもり、オボイ首領さまと敬愛する將軍さまを敬慕して万民が訪れる場所、民族の英知に富んだ歴史がこもっているのみならず、代を継いで首領福、將軍福を享受する金日成民族の矜持が集大成された妙高山に来て世界最高の文明とはいかなるものかを体験することは、実に胸を熱くさせることである。ガラガラした享樂の世界を訪ねいく人々

は、朝鮮にもこのような恍惚たる建築世界があることを信じられぬことであろう。香山ホテルで一晩を過ごせば、人はわれわれが建設する主体の社会主義がいかに良き世であるかを知るはずである。また、朝鮮が世界へ向かって進むとはいかなる意味か、強盛大国に暮らすことがいかなるものであるかを痛感することであろう。このような創造物を苦難を乗り越えてきた朝鮮の人々が作ったとは、なんと驚くべきことであろうか。『文明』と『開化』について騒ぎ立てる資本主義世界では想像もできない最上の享有世界を展開し、ホテルのドアを開いたわれわれの現実は何とまばゆいことか。主体の社会主義楽園は人間がもっとも高尚で文明的な生活を享受して暮らす世界である。われわれには資本主義の億万長者たちが夢想するものよりもさらに恍惚たる享有の世界を創造する抱負があり、計画があり、またその能力があり、目の前の現実はそのが実際に繰り広げられていることを証明している。香山ホテルを通じて世界は知ることだろう。朝鮮の人々がいかに文明的な人々であるか、生活慣習からして曇りなき朝鮮の人々の文明に対する志向がいかに高く、世界へと向かって進む自尊心がいかに高いかを、知ることだろう。われわれが建設する強盛大国とはいかに文明的な世界であるかを、想像できることだろう。わが民族の歴史を振り返れば、火縄銃ひとつとともに作ることができずに侵略の対象となるほかなかった、胸の痛む悲劇のみがあったのではなかった。解放前、わが国を訪れた外国人が、客人を迎えるまともな旅館ひとつ持たない朝鮮の人々を無知蒙昧という言葉になぞらえ、『^{チゲツクン・ソリョン}担ぎ人足の小僧』という粘土細工を捏ね上げて帰国したという血涙の悲話がわが国の歴史には音もなくこもっている。なればこそ、世界で最も聡明にして文明的な『白衣民族』の尊厳が他者によって踏みにじられ、賤しめられることを嘆き、『目覚めよ、目覚めよ、他人の富強を羨むのではなく、みな立ち上がって文明開化を成し遂げよ』と歌った涙の『同心歌』を残した愛国詩人もいたのである。国の文明の程度は首領によって決定される。大同江文化を創造した尊厳ある民族として、余人が羨むような社会主義生活を花咲かせ、世界に先駆けようとする志向に満ち溢れた人民の願いを存分にかなえてやるために生涯を捧げられたオボイ首領さま。解放後の^マ文盲退治運動によってわが人民を無知蒙昧の世界から目覚めさせてくださり、社会主義建設者という誇り高い呼称とともに朝鮮人民の誇らしき姿を世界に堂々と示してくださった偉大な首領さまの不滅の歴史を輝かしく継いでいかれる絶世の愛国者金正日将軍さま。オボイ首領さまが打ち立てられた社会主義祖国の地に文化芸術の全盛期、建築芸術の全盛期を呼び起こされ、苦難の吹雪を縫って行がいまだ知らぬ先軍文化の高い世界を創造してこられた敬愛する将軍さまの不滅の業績を、後世万代永遠に忘れることはできない」¹²

ともあれ、この点が、金正恩が後継体制の構築に際して常に意識し、対処しなければならない

いまひとつの課題ということになり、このことから、より直接的・可視的な成果の導出が志向されることが予想されるのである。

4. 金正日の健康問題－時間的逼迫

そして、何よりも「後ろ盾」たる父・金正日の体調が、金正恩の後継体制構築の成否を左右する最大の不安要因となっている。2008年に一時重篤な状態に陥ったとされる金正日は、翌2009年からは自身の健康不安を払拭するかのごとく、活発に対外活動を行うに至る。「世界的に見ても、蒸し暑い夏の時期に避暑地へ向かうことは国家指導者たちにとっての通例となっている。しかし、人民の幸福を思う一念に心を燃やされる偉大な將軍さまにおかれては、焼きつけるような日差しが降り注ぐ中、汗に濡れたハンカチを幾度も取り替えつつ球場養魚場（平安北道：筆者註）を現地指導なさり、日中の最高気温が33℃という記録的な数値を示した日に野戦服を汗でぐっしょりと濡らされながら首都の奉仕単位をお訪ねになったという胸を熱くするような事実を、世界はいまだ知らずにいる」¹³と、その「精勤」を強調する言説がこれに合わせて展開されることになるが、その過程でより直接的に「可視化」したのは、むしろ金正日の体力の衰えであった。この点に与っては、『労働新聞』の報道様式が大きく変化したことも作用しており、従来よりも写真を多用して金正日の現地指導を報じるようになったことが、逆にその健康状態への不安を惹起することとなったのである。例えば、2010年10月にある演劇俳優の家庭を訪問した際の模様を報じた『労働新聞』記事は、記事の体裁こそ従前同様に「チン・オボイ」（真の親）の情をもって人民の暮らしぶりに細々とした配慮と恩情を施すとのスタイルを維持しているものの、そこで映し出される金正日の姿は、麻痺が残るとされる左腕をだらりと下げた面曇れの目立つものであり、もはやその衰えは明らかであった¹⁴。斯様な『労働新聞』の報道スタイルの変更自体、金正日の指示によるものであったとされているが¹⁵、その点を考慮しても、金正日の体力低下の印象は拭えず、金正恩が先に触れたイデオロギー政策実行上の制約（いくなれば政策的フリーハンドの減衰）に加え、物理的な「残り時間」の点でも制約を課されていることが印象付けられたのである。あるいは、かねてより「強盛大国の大門を開く」年として公言してきた2012年に明確な実績を示すことよりは、むしろ金正日の健康そのものが、金正恩にとって最大の「タイムリミット」であるとも考えられよう。

結論にかえて

以上、金正恩による後継体制構築の現段階と展望について、雑駁ながら分析と検討を行った。経済的成果、なかんずく民生と関連した可視的な成果が金正恩の業績として取り上げられる蓋然

性が高いことがその最大の示唆点であるが、今後は遡及的な過去の活動への言及が進むことが予想され、2011年に入ってそのような動きの端緒ともいえるべき傾向が実際に看取され始めていることから¹⁶、整理の用に供するべく、2010年度に報道された経済的成果の一覧を付しておくこととしたい。

<付表2> 2010年に完工・竣工が報道された経済関連施設（日付は『労働新聞』掲載日）

- ・ 2.8 ビナロン連合企業所のビナロン生産工程現代化工事が完工、ビナロン生産を開始（2月11日付社説）
- ・ 大安重機械連合企業所で礼成江青年2号発電所1号発電設備の生産が終了（2月25日付）
- ・ 金策製鉄連合企業所で円弧式連続造塊機の操業式（3月4日付）
- ・ 礼成江青年2号発電所4号水路が完工（3月12日付）
- ・ 金日成総合大学電子図書館の竣工式（4月15日付）
- ・ 南興青年化学連合企業所無煙炭ガス化による肥料生産工程の操業式（4月30日付）
- ・ 大安重機械連合企業所で礼成江6号発電所発電設備生産が終了（5月4日付）
- ・ 金野江発電所建設場で全般的な建設工事が完工段階に（6月2日付）
- ・ 3月5日青年鉍山生産能力拡張工事が完工、操業式（6月3日付）
- ・ 白頭山先軍青年1号発電所水路工事が基本的に完工（6月21日付）
- ・ 大安重機械連合企業所で熙川1号発電所重要設備生産が終了（6月23日付）
- ・ 大溪島干拓地建設が終了、竣工式（7月1日付）
- ・ 楽元機械連合企業所で「長白」号掘削機を新たに製作（7月4日付）
- ・ 龍城機械連合企業所で金野江発電所対象設備生産が終了（7月18日付）
- ・ 雲龍江3号発電所が新たに建設される（7月21日付）
- ・ 金野江発電所堰堤が完工（7月30日付）
- ・ 礼成江青年2号発電所竣工式（8月6日付）
- ・ 載寧炭鉍2段階ベルトコンベア工事が完工（8月17日付）
- ・ 龍城機械連合企業所先軍鑄鉄工場・先軍圧縮機職場の竣工式（8月18日付）
- ・ 改建された沙里院競技場の竣工式（9月2日付）
- ・ 礼成江6号発電所竣工式（9月4日付）
- ・ 熙川発電所建設に参加しているミル原水路工事中央指揮部で水路拡張工事が基本的に完工（9月8日付）
- ・ 「蓮河機械」集団で新型の9軸穿鑿加工中心盤を開発（9月11日付）

- ・元山軍民発電所が竣工（9月19日付）
- ・平壤穀産工場の糖菓類職場竣工式（9月26日付）
- ・黄海北道人民学習堂の竣工式・茂山鉍山連合企業所1号大型円錐形破碎場が完工（9月27日付）
- ・千里馬製鋼連合企業所で2号超高電力電気炉試運転、現代的な合金鋼生産基地が完工、550 m² 酸素分離機を設置（9月28日付）
- ・祝砲科学研究生産機関でウリ式の現代的な祝砲を開発（10月3日付）
- ・白頭山先軍青年発電所建設場で仮排水路の最終的な導水を実施、対象別工事が完工（10月3日付）
- ・金策製鉄連合企業所で高速還元法による主体鉄生産体系が確立、鉄生産の正常化が実現（10月8日付）
- ・朝鮮中央通信社報道：全国的に250あまりの対象建設が完工、主要工場、企業所で年間計画を完遂（10月13日付）
- ・大紅湍ジャガイモ加工工場で発酵・水飴生産工程のCNC化実現（10月14日付）
- ・改建された平壤舞踊大学の竣工式（10月16日付）
- ・新たに建設された国立演劇劇場の竣工式（10月18日付）
- ・平壤靴下工場の女性用靴下職場で竣工式（10月28日付）
- ・端川マグネシア工場が無煙炭豆炭生産工程をはじめとする建設対象が完工し竣工式（10月29日付）
- ・千里馬製鋼連合企業所の2号超高電力電気炉操業式（10月30日付）
- ・玉流館料理専門食堂で竣工式（10月30日付）
- ・新義州紡織工場で1万錘毛糸生産工程が新たに完成（11月2日付）
- ・会寧市で社会給養奉仕基地（厨房工場、会寧館、飲食店通り）が完成（11月5日付）
- ・プンジ湾干拓地が完工（11月11日付）
- ・清津市の富寧4号発電所で導水堰堤が完工（11月12日付）
- ・茂山鉍山連合企業所1号大型円錐形破碎機操業式、2選鉍場技術改建工事完工（11月17日付）
- ・平壤豚工場の能力拡張・改建工事が最終段階（11月27日付）
- ・マグネシアクリンカーと珪素マグネシア生産の主体化を完全実現し、端川マグネシア工場が屈指の総合的耐火物生産基地に転変（11月28日付）
- ・現代的な大規模チョウザメ養魚体系が確立、沿岸地域でのチョウザメ養魚に完全成功（12月2日付）
- ・熙川発電所建設場の導水路が全区間で貫通（12月8日付）

- ・白頭山先軍青年発電所1号発電所が早期操業（12月13日付）
- ・恵山青年鉱山の改建工事が総工事量の80%を突破（12月14日付）
- ・大安重機械連合企業所大安電機工場で熙川1号発電所の対象設備生産が最終段階（12月18日付）
- ・高山果樹農場現代化工事場で2段階土地整理が完了（12月27日付）
- ・白頭山先軍青年第1号発電所で電力生産開始（12月28日付）
- ・平壤紡績工場テトロン人絹布職場竣工式（12月31日付）

しかしながら、その過程において金正恩が一あるいは金正恩の後継者としての「実績作り」を担う政権当局者たちが一直面するのは、直接的な経済的成果の提示という課題に加えて、それを伝達するためのプロパガンダの「有効性」の逡巡、そして金正日の健康不安という制約であることも、文献の記述傾向より明らかとなった。これらを常に意識しながら、経済的成果の導出を目指すという難題が、ともすれば北朝鮮をして、より直接的な軍事的挑発行為による緊張状態の醸成と対内的な結束の強化という手法をとらしめる可能性は—2010年の展開をふまえる限り—排除できないが、そのような傾向を「感知」する意味でも、内政分析の継続は（繰り返し述べたプロパガンダの実効性の低下とは無関係に）必要といえそうである。ここに示した諸点がいかなる推移を見せるかに着目して経過を追うことも、組織人事における金正恩の地位や動静確認と合わせて、一定の意義を持つ「切り口」たりえよう。ただし、同時代的な現象に対して外部の観察者がなしうることには限界があり、夙にカントが指摘した「私は或る必然的存在者を想定することなしには、現存することのための諸条件への背進をけっして完結することはできないが、しかし私にはこの必然的存在者から始めることはけっしてできないのである」（『純粹理性批判』第2版、1787年）との箴言もまた、分析者は銘心すべきと考える。結局、現在の後継体制をめぐる状況、そして北朝鮮政治の動向は、「金正日は結果だが、金正恩は原因である」とでも表現すべき状態にあり、外部観察者が見出そうとしているのは、その内実がいかなるものかであるかよりは、そこにいかなる「道筋」がつけられることになるのかである点は、研究者であれ政策立案者であれ、常に認識すべき事柄であろう。

—注—

- ¹ なお、朝鮮中央テレビなどの他媒体が報じた動静をも網羅した同様の一覧表はすでに『RP 北朝鮮政策動向』第452号、ラチオプレス2011年2月が作成しているが、ここでは対象を『労働新聞』に限定し、また後日遡及的に言及された動静を除外することによって、リアルタイムで報じられたものに近い「像」を浮かび上がらせることを試みている。
- ² 「政論 愛国に満足はありえない」『労働新聞』2010年6月12日付。
- ³ 「自力更生を宝剣として握み」『労働新聞』2010年12月19日付。文中の「山びこ」は1961年に創作された軽喜劇を指す。同劇は2010年に国立演劇団によって再監修がなされ、金正日は3度にわたりリメイクされた同劇を観覧したとされている（『労働新聞』2010年4月27日付、5月9日付、8月18日付）。
- ⁴ 「政論 リンゴの海 笑い声」『労働新聞』2010年9月20日付。
- ⁵ 「偉大なるわが祖国」『労働新聞』2010年5月13日付。
- ⁶ 「文明をとどろかせよう—社会主義文明の先端に上り詰めた香山ホテルを見て—」『労働新聞』2010年3月10日付。
- ⁷ 「政論 種火を大切に慈しもう」『労働新聞』2009年4月12日付。
- ⁸ 「偉大な領導者金正日同志におかれては平壤市の軽工業工場と新たに建設された普通江百貨店を現地指導された」『労働新聞』2010年12月11日付。中国製の洗濯洗剤が百貨店の商品棚に並んでいることが写真より確認可能。
- ⁹ 「政論 朝鮮を知りたくばとくと見よ」『労働新聞』2010年11月13日付。
- ¹⁰ 例えば「偉大な領導者金正日同志におかれては熙川市内の工場・企業所を現地指導された」『労働新聞』2009年5月10日付。機械工業の中心地とされる同市の工場で日本製の工作機械が稼働していることが写真より観察可能である。
- ¹¹ もっとも、プロパガンダと現実のつながりが完全に切断され、プロパガンダがひたすら無内容な言説を反復するだけのものとなる事態も一当然ながら一同時に想定されうる。現時点での北朝鮮は「現実とプロパガンダの間に、弱化しながらも一定の繋がりが認められる」状態であるというのが筆者の認識であるが、今後においてもその状態が継続する（あるいは再び密接化する）可能性は極めて低く、さらなる影響力の低下が予想されよう。
- ¹² 前掲「文明をとどろかせよう」。
- ¹³ 「春夏秋冬、雨雪を乗り越えて進まれる不滅の現地指導強行軍」『労働新聞』2010年2月22日付。「気象水門局」の気象記録をもとに、金正日が2009年中に行った200回あまりの現地指導が過酷な気象条件の中で実施されたことを強調している。
- ¹⁴ 「偉大な領導者金正日同志におかれては新たに建設された国立演劇劇場をごらんになり、入居したばかりの芸術人らの家庭を訪問された」『労働新聞』2010年10月9日付。それ以前の類似の記事としては、例えば「偉大な領導者金正日同志におかれては両江道大紅湍郡総合農場を現地指導なさった」同2000年3月27日付。ここでは農場への移住を志願した除隊軍人夫婦の新居を訪問した際の模様が一主に文章を通じて一報じられている。
- ¹⁵ 朝鮮総連機関紙『朝鮮新報』によれば、2010年2月22日に開催された「全国記者・言論人大会」参加者に金正日が送った書簡の中で、金正日がそのような指示を下したことが明らかにされたという。ただし同会議を報じた『労働新聞』記事ではそれに類する記述は見られない。「<今月の金正日総書記—3月—>ビナロン再建の意義強調」『朝鮮新報』（インターネット版）2010年4月7日付<<http://www1.korea-np.co.jp/sinboj/j-2010/04/1004j0407-00004.htm>>、2010年3月1日アクセス。
- ¹⁶ 2011年3月3日付『労働新聞』に掲載され、以降不定期に連載された特集記事「將軍さまとCNC」は北朝鮮におけるCNC導入政策の過程と、それを指導した金正日の逸話を集成したものであるが、その中には現地指導を行う金正日に同行し、時には直言をも行う幹部がたびたび登場している。現時点ではそのような人物の詳細は

詳らかにされていないが、今後は同様の記事を通じて、徐々に金正恩の行動とその金正日への「献身」が時を遡る形で「公開」されていくこととなろう。

